魔王の始め方
4
How to Govern the Devil
【小説】笑うヤカン
【イラスト】新堂アラタ
story works by warau yakan illustration works by shindou arata
試し読み版
BEGINNING NOVELS

プロローグ

「おお……」

白い砂を踏みしめて、男は思わず感嘆の声をあげた。

砂浜の向こうには広大な平原が広がり、彼方には森が、そして美しい山々が聳(そび)え立っている。

見たこともない草木や花々が生い茂り、聞いたこともない鳥の鳴き声が響き、風の匂いさえ違うもののように感じられる。

どちらかと言えば安定を好む彼をして胸を高鳴らせる、未知の塊がそこにあった。

「オ〜、ウ〜、ル〜……」

そんな彼に、未知とは正反対の聞き慣れた声がかけられる。恨めしげな声に視線を向ければ、見慣れた姿の使い魔がよろよろとした様子で船から降りてくるところだった。

「どうした、船酔いでもしたか？」

「悪魔が船酔いなんかするわけないでしょっ！　わたしの作った魔動船に何したの！」

淫魔はびしりと船を指す。魔力で動くその船は彼女が設計した力作であり、言い換えれば彼女自身の子にも等しいものだ。

「ああ。航海は長くて暇だったからな。住みやすいように作り替えてみた。船の機能自体には問題ないから気にするな」
「船室をダンジョンにされて気にしないわけないでしょ、このダンジョン馬鹿――――――っ！」
リルの叫び声が、新しい大陸に響き渡った。

「新大陸？」
ことの起こりは、一年ほど前だった。
「そうだ。まあ便宜上の名前で、土地としてどちらが新しいかはわからんがな。ともかく、我々の住んでいるこの大陸から遥か東……海を隔てたところに、巨大な陸地があるということがわかった」
ばさりと広げられた地図を覗き込む顔は五つ。
リル、ユニス、スピナ、メリザンド、そしてオウル。
魔王の国を動かしている、国の核とも呼べる顔ぶれだ。
「あっ、あたしが前、空の上から見たやつだ」
王妃となったユニスは、生まれたばかりの子を抱いてあやしながら声をあげる。
「結構遠いのね……」
指で新大陸までの距離を計りながら呟くのは、忠実なる使い魔のリル。
「いよいよ別の大陸にも打って出る、ということですね」
魔王の第一の弟子、スピナは意気込んだ様子で表情を引き締める。

「大陸全土を支配し、安定もしているのだ。わざわざ危険を冒す必要はあるのか？」
元聖女でもあり片腕でもあるメリザンドは、オウルの意図をわかっていてあえて尋ねた。
「攻めこむというわけではない。むしろその逆だ」
「逆……ですか？」
目を瞬かせるスピナに、オウルはうむと頷く。
「我々は新大陸の情報を全く持っていない。ここに陸地があるということしか知らんのだ。いつかは必ず、彼の地に住まう者たちがこちらに侵攻してくるだろう。そうなる前に情報を集めておかなければならん」
「防衛のために偵察ってことだね」
ユニスが嬉しそうに声をあげる。
「となれば……迷宮ごと、というわけにはいかないか」
「無論だ。距離の問題もある」
オウルの作り上げた迷宮は大地の下に横たわる地の迷宮と、空をたゆたう天の迷宮とに分かれている。天の迷宮は自由に移動できる大拠点だ。他国に攻め入るならこれほど優れた兵器はない。
が、その巨大さと空を飛ぶことから、とかく目立つという欠点があった。新大陸で目撃されては秘密裏に情報を集めるのは不可能だろうし、こちらの大陸を完全に不在にするわけにもいかない。
「少数の人員を、船で送り込む。リル、少人数でも操れる船は作れるか？」
「勿論。任せといて」

リルの専門は魔兵器の制作だ。砲や火矢のみならず、乗り物もその範疇だった。
「でも、誰が行くの？」
ユニスが素朴な疑問を呈する。
未知の新大陸へと渡り、情報を集めてくる。重要かつ困難な任務だ。できそうな人材は極めて限られていた。最も向いていそうなのはユニスだったが、生憎と彼女は子育てに忙しい。愛情深い王妃は、己の息子の世話を侍女に任せきりにする気など毛頭なかった。
「そうだな。高い判断力を有し、あまり目立つことのない容姿で、できるだけ汎用性の高い能力を持ち、ある程度戦闘も可能で、万一の場合でも命を失う危険性のない者が望ましい」
「……そんな人いたっけ？」
リルは配下の顔を思い浮かべながら、指折り数える。
エレン、セレスたちアールヴは生存能力も戦闘能力も高いが、判断力に少し難がある。
その点ナジャ、シャル、ウィキアの元冒険者組はその経歴だけ見れば頼りになるが、死んでしまう可能性がないとは言えない。
悪魔のローガンはもし死んでも魔界に帰るだけだが、その外見はあまりに目立つ。
獣使いのミオは非常に強いがその能力はあまりに獣に特化していて、人間相手の情報収集は難しそうだ。
メリザンドの使役する英霊という手もあったが、肉体を持つユニスと違って普通の英霊の維持には莫大な理力が必要となるため、長期に渡る運用は難しい。

オウルの挙げた条件を全て満たす者は、人材豊富な魔王軍といえども中々いないように思える。
「ああ、一人だけいる」
オウルは親指でぐっと己の胸を指し、言った。
「俺だ」

Step.1　じゃじゃ馬娘を躾けましょう

1

そしてそれから、一年後。

万事準備を整え新大陸へとやってきたオウルとリルは、一先ず船の錨を下ろして岸に固定すると平原を歩いていた。

「この辺りでいいか」

そう言ってオウルが足を止めたのは平原の境、鬱蒼と茂る森の入り口だ。

「ん、焚き木集めてくる？　それとも、食べられそうな木の実か動物でも取ってこようか？」

「別にここで野営をするわけじゃない」

張り切るリルに、オウルは呆れて声をあげる。

「ここに、ダンジョンを作るんだ」

「ええー……またダンジョン？　一から？」

「露骨に嫌そうな顔をするな」

端整な顔をしかめてみせる使い魔に、オウルは懐から小瓶を取り出した。

「今回はこれを使う」
「なにこれ。小型のダンジョンコア……？」
本拠地にあるダンジョンコアは、魔力を貯めこむほどにひとりでに膨らんでいく。今やリルすらどれほどの大きさになっているかわからない。しかしオウルが取り出したそれは、手のひらにすっぽりと収まる程度の大きさだった。
「基本的な機能は同じだ。魔力を貯蔵し、自由に取り出せる。だがこれにはそれに加えて、一つ能力を与えてある。……ダンジョンシード、とでも呼ぶか」
「ダンジョン、シード……？」
オウム返しに繰り返すリルに頷き、オウルはダンジョンシードを地面の上に落とした。途端、地面がぐねぐねと蠢き、ダンジョンシードは大地の中に潜り込んでいく。
「わ、わ、なにこれ！」
「俺の使う迷宮魔術。それを用いて半自動的にダンジョンを作り出す、一種のゴーレムのようなものだ」
ダンジョンシードは大きく穴を穿ち、どんどん地中深くへと洞窟を掘り進める。その壁面が輝いたかと思えば、掘り抜かれたままの土壁は箒で掃かれるようにしてレンガ壁に作り替えられた。
「事前に仕込んだ魔力を使って迷宮を広げつつ、そこから魔力を収集して更にダンジョンを大きく広げていく。まあ龍脈に突き当たりでもしない限りは収集量より消費量の方が多いだろうから直に止まるだろうが、仮の住処としては十分だろう」

「凄い凄い、これがあるならもう自分でダンジョンの設計とかしなくていいのね！」
「いや、そうでもない」
興奮を露わにする使い魔に、主は冷酷に首を振った。
「自動的に作られるということは、そこには一定の法則性があるということだ。計算に依ってのみ成り立つダンジョンには、人間の悪意が足らん。侵入者を騙し、陥れ、その心を挫く悪意がな」
「はいはい、あなたの底意地が悪いのは、よ———く知ってるから。そんなことより、さっさと入ってみましょうよ」
いまいち理解を得られていない気がしたが、オウルはリルの言葉に従って迷宮の中に足を踏み入れる。
「ほら、結構素敵じゃないの」
まるで新居にはしゃぐ新妻のような調子で、リルは地下回廊の中を軽やかに舞った。
「まて……様子がおかしい。ダンジョンシードが上を目指している」
基本的に、地中の魔力というのは深いほど濃い。それ故、ダンジョンシードは放っておいても深く深くへと根を張っていく。ところが、オウルが進む通路は途中から傾斜角度を変えて、上方へと続いていた。
「えっ、何か……」
言った？　と続くはずだったリルの言葉は、物理的に遮られた。
突如通路を埋め尽くした、植物の根によって。

「ちょっと、なにこれ！　ダンジョンシードの根っこ⁉」
「いや……これは、本物の植物の根だな。だが無関係というわけでもない」
ダンジョンシードは周囲のものを利用して、ダンジョンを作り出す。通常は地面……即ち土そのものだが、場所によっては砂や岩、金属の鉱石など、様々な物質が織り交ざることを想定して作られている。勿論そこに、木々も含まれていた。
「この樹はどうやら、魔力を蓄える性質を持っているようだ。それで、ダンジョンシードは地下ではなく地上へ向かっていったのだな」
「冷静に言ってる場合かーっ！　ああもう、オウル、ちょっと下がってて！」
根の壁越しのリルの言葉に従って下がると、ややあって爆発音が鳴り響き、隙間から煙が漏れ、リルが盛大に咳き込む声が聞こえてきた。
「……大丈夫か？」
「何この樹、滅茶苦茶硬いじゃないの！　石火矢を使っても傷一つつかないってどういうこと⁉」
「迷宮の壁だからな。そう簡単に壊されるわけなかろう」
「威張るなー！」
叫ぶリルを無視して、オウルは壁面に触れる。木の根の壁は一瞬ぐにゃりと歪んでリルの煤だらけになった顔が見えたが、すぐに蠢いてピタリと閉じた。
「駄目だな。森の魔力を吸って、ダンジョンシードが迷宮を維持し続けている」
「……どういうこと？」

「端的に言えば、森にダンジョンを乗っ取られた状態だな」
「なんでそんな楽しそうなのよ……」
壁の向こうから、疲れを滲ませた声が聞こえてくる。
ぐったりと地面にへたり込むリルの姿が思い浮かぶようだ。
「楽しそう、だと？」
オウルが思わず己の頬に触れれば、口元は笑みの形に歪んでいた。
「今、笑ってるでしょ」
それを見透かすかのように、リルの指摘が飛んでくる。
「何故わかる？」
「見なくてもわかるわよ。わたしがよーく知ってる表情だもの、それ」
疲れ果てていたはずのリルの声も、いつの間にやら笑みを含んだものになっていた。
「そうよ。最近その顔してなかったから、すっかり忘れてたわ」
広大な大陸を治め、国々を統治し、政務に勤しむ毎日。
それは間違いなく、かつてオウルが渇望し、そして手に入れた平穏な日常だ。
「いいんじゃない。なんだかんだ言ってわたしもその顔嫌いじゃないから……さっさとこの迷宮、何とかして頂戴」
「ああ」
――だが。

「では手始めに、親に逆らうこの迷宮を躾けに行こうか」
この不測の事態に、邪悪なる老魔術師はニヤリと笑ってそう言った。

2

「ふむ……やはり、駄目か」
リルと別れて、オウルは一人迷宮の中を歩いていた。
数ヶ所、扉を作って壁を越えられないか試してみたものの、材質が石だろうと土だろうと木の根だろうとすぐさま修復されてしまう。
「思った以上に魔力を溜め込んでいるようだな」
それは文字通り、この迷宮がまだ生きていることを示していた。
ダンジョンシードにあらかじめ溜めておいた魔力はそれほど多くはない。
普通の土地であればとっくに魔力を枯渇させているはずだが、どうやらいきなり当たりを引き当ててしまったらしかった。
「このじゃじゃ馬め」
壁と天井を突き破り、木の根が槍のように飛び出してくる。それはオウルの身体を貫く寸前で、石の壁に阻まれて半ばからへし折られた。
「妨害が来るということは、こちらの道で正しいということだな」

オウル自身が作った迷宮であれば、そのような道理は通用しない。だがこれはダンジョンシードが自動で作り上げた迷宮だ。基本的には最小の魔力で最大の防衛効果を発揮するように生成される。無駄な道にまでは罠は張られない。

複雑に入り組んだ迷宮の中を、オウルは地図も描かず目印さえつけず歩いていく。冒険者でさえ、熟練の者であれば歩測と方向感覚だけで詳細な地図を描くことができるのだ。ダンジョンマスターたるオウルが迷宮で迷う道理などなく、彼はほぼ最短距離でダンジョンシードへと向かっていた。

森の入り口で創りだした迷宮は、森全体を飲み込むように中心部の方へと広がっている。恐らくは森の中心がダンジョンの中心にもなっているだろう、とオウルは当たりをつける。

その足が、ピタリと止まった。

「やはり、ついてきているな」

口の中で小さくそう呟く。

彼は迷宮に入ってからすぐに、何者かの気配を背後に感じていた。

リルではない。彼女ならばコソコソしたりせずに、直接話しかけてくるだろう。

できたばかりのこのダンジョンに、先に入った者がいるとも考えづらい。

ということは、オウルがダンジョンシードでダンジョンを作るより前から後をつけてきたものがいるということだ。

オウルに気づかれずに後をつけるということは、それなりの手練と見ていいだろう。

だが、迷宮の中でオウルからその存在を隠しおおせるのはほぼ不可能だ。

動かずじっとしているならまだしも、動いているならその足音や振動は必ず伝わる。
オウルは曲がり角を曲がり、懐から小さな石の箱を取り出した。
その表面に指先を這わせると、石の箱は組木細工のようにパタパタと展開し、あっという間に大きく広がる。それはまるで翼のようにはためくと、一瞬にしてオウルを移動させた。
通路を進む何者かの振動が、途端に速くなって通路を曲がる。
そして、そこでピタリと止まった。
オウルが進んだはずの通路は、曲がってすぐ行き止まりになっていたからだ。
戸惑うように振動の主はその場で一度、二度足踏みする。
そして一歩元の通路へ戻ろうとした瞬間、オウルは魔力を込めた指先をそれに這わせた。
展開して行き止まりの壁に擬態していた石の箱が、まるで蛇のあぎとのように追跡者を狙う。
敵もさるもの、剣閃が走って蛇のあぎとは防がれるが、そちらはフェイントだ。
石畳と天井に擬態した部分から同時に壁がそそり立って、追跡者を閉じ込める。
「……さて」
無事相手を捕獲して、オウルは深く息をついた。本来なら更なる反撃に備えて石箱を縮小、壁を厚くするところなのだが、その必要はなさそうだと彼は思う。
「聞きたいことは色々あるが――――」
壁に挟み込まれるようにして身体を拘束され、閉じ込められているのはまだ女の子と呼んでいい年齢の少女だった。だがそれだけで油断するほど、オウルは生易しい人間ではない。

ただ単純に。
「お前は何をやってるんだ、マリー」
壁の中から上半身だけを突き出すような間抜けな体勢で照れ笑いを浮かべる少女は、顔見知りの相手だった。

3

「ではお前は、船の中にずっと隠れていたというのか」
「うんっ」
拘束された状態のまま頷くマリーに、オウルは頭痛を堪えるような仕草で額に手のひらを当てた。
「一体なんだってそんなことを……」
「だってついていきたいって言っても、オウルさま駄目って言うでしょ？」
「当然だ」
「だからだよぉ」
マリーは不満気にぷっくりと頬を膨らませた。
「わたし、もう子供じゃないもん」
子供そのものの仕草で言い放つ彼女に、オウルは思わずため息をつく。
全く説得力がなかった。

とはいえ確かに、未だにあどけなさは多分に残っているものの、もはや彼女は出会ったばかりの頃の幼い子供ではない。むしろ純粋な戦闘能力という点で見れば今やオウルやリルより強いと言ってもいいほどだ。

「わたしももっと、オウルさまに信用してほしい……」

にもかかわらず、オウルが何故彼女を重用しないかといえば。

「別に、お前のことを信じていないわけではない。ただ……」

「たいせつに、大事に思ってくれてるんでしょ？」

マリーはその理由を、ズバリと言い当ててみせた。端的に言ってしまえばそういうことである。

幼い頃から見知っている身となれば、過保護にもなる。十分強いとはいっても、オウルは常に万が一を考えてしまう性分なのだ。

とはいえ彼女を連れていかない理由はそれだけというわけでもない。

「……俺の言いつけをしっかり守り、勝手に視界から離れないと誓うか？」

「マリーはちゃんとオウルさまの言いつけ守ります！」

ピシリと手を上げて、マリーは宣言した。

むしろ問題なのはその自由闊達な気性の方だった。

とにかく、何をやらかすのか魔王をして全く予想をつかせないのだ。

「……破った時は無理矢理にでも帰すからな」

「はーい！　ちゃんと守ります！」

返事だけは調子よく返すマリーに、オウルは深くため息をついた。
置いてきても隙を突いてくるなら、手の届く範囲に置いておいた方がまだマシかも知れない。
「ねーねーオウルさまーオウルさまー」
そんなことを思っていると、マリーがしきりにオウルの名を呼ぶ。
「ところでこれはいつ解いてくれるの？」
彼女は未だ、オウルの作り出した壁に挟み込まれたままだった。
「ああ……」
オウルが石箱を操作すると、壁は彼女を挟み込んだままくるりと回る。
ちょうど腰のくびれの辺りを固定されて、壁面からマリーの尻だけが飛び出している形だ。
「あ、あれあれー？」
「じゃじゃ馬娘に躾をしてからだ」
オウルは傲然と、そう言い放った。

4

「お、おうるさまぁ……これ、なんか、恥ずかしいよぉ……」
オウルの眼前で、白い尻だけがふるふると震える。
壁から尻だけが突き出ている様は何とも滑稽だったが、同時に奇妙な淫猥さがあった。

「当たり前だろう。何の苦もなければ罰にはならん。ただ犯すだけではお前は喜ぶだろうが」
「そうだけどぉ……ひぁんっ！」
下穿きを脱がし、スカートを捲り上げて露わになった尻をオウルは無遠慮に掴む。
「中々肉付きが良くなってきたな」
「ふ、太ったわけじゃないよ！」
「誰もそんなこと言っておらんだろう」
初めて彼女を抱いたのは一年ほど前の話だ。その一年の間に、彼女の身体は主の寵愛を存分に受けて随分成長した。
若い尻肉は張りと弾力に満ち満ちて、それでいて指に力を込めればどこまでも淫らに歪む柔らかさがある。まだまだ幼いと思っていたが、丸く膨らんだ臀部は既に成熟した女らしさを多分に持っていた。
「立派に育ったものだ、と思ってな」
「ううう、はずかしいよう……オウルさま、あんまりみないでぇ……」
マリーはもじもじと太股を擦り合わせる。本人としては羞恥ゆえの反応なのだろうが、オウルから見れば誘っているようにしか見えなかった。
「んっ……あ、ぅん……」
ぴっちりと揃えて閉じた太股を手のひらを差し入れてこじ開け、ゆっくりと撫で上げていけば甘い吐息が漏れ聞こえてくる。

「ひぁあんっ！　お、おうるさまぁ」
尻肉を両手で割り広げるようにしてその中心に舌を伸ばすと、マリーは困惑と媚が入り混じったような声をあげた。
それに構わず蜜を滴らせるスリットを丁寧になぞり、舌先を差し入れ、ぷっくりと張り詰めた秘核を転がしていく。
「いやぁ、こんな、状態じゃなくて、ふつう……ふつうに、あぁんっ」
全ての悪意を寄せ付けない迷宮の中で、マリーは大切に育てられた。基本的にオウルに対しては聞き分けの良い娘ではあるが、しかしやはりわがままなところがないとはいえない。
「おねがい、おうるさまぁ……わたし、ふつうにおうるさまとえっちしたい……こんなの、へんたいみたいだよぉ」
マリーはくねくねと腰をよじりながら、甘い声で懇願した。そうやって甘えればなんだかんだと、オウルは彼女の言うことを聞いてくれると知っているのだ。
「誰が変態だ、失礼な。普通にとはどういうことだ？」
オウルはゆっくりと彼女の秘部に指を出し入れしながら、意地悪く問う。マリーの媚肉は指を咥え込みながらも、ひくひくと物欲しそうに蠢いた。
「まえからぁっ、まえから、ぎゅってして、してほしいのぉっ！　おくちでも、おっぱいでも何でも好きにしていいからぁっ！　おうるさまの、お顔みながらえっちしたいのぉ！」
マリーは余裕をなくした悲痛な声で請い願う。

「そうか。わかった」
オウルが頷いて指を抜くと、ほっとしたマリーの身体から力が抜ける。
「だが駄目だ」
「んぁぁぁぁぁぁぁんっ！」
そこに、オウルは思い切り剛直を突き入れた。
「なっ、あぁぁっ、なんでぇっ？」
「これは罰だと言っただろう」
壁から突き出た尻を両手で抱えるようにして、オウルは手加減抜きで彼女の膣内を陵辱する。
相手のことを一切考えない、己の快楽のためだけの自分本位な動き方だ。
「いやぁっ、おうるさまぁっ！」
壁に動きを封じられ、顔も見えない相手に好き勝手に犯される。
それはまるで、種付けされる家畜のような扱いだった。
「やぁ……こんなの、やなのにぃ……」
涙混じりの声とは裏腹に、彼女の腰はオウルの抽送に合わせて淫らに動き、膣口はオウルの肉槍をきつく咥え込みながら浅ましく涎を垂らす。
普通であれば屈辱しか感じない状況にもかかわらず、一年間オウルに丹念に可愛がられたマリーの身体は勝手に反応し、快楽を貪っていた。
「……ふぅっ、あっ……！　あぁぁっ……あぁぁんっ！」

ぐっと奥歯を噛み締めても、ずんと奥を突かれると脳髄が蕩けるような快楽が背中を走り、喉からは甘く媚びた声が出ている。それを意識してしまうと、もう駄目だった。
「あぁっ、だめ、だめぇっ！　そこ、あぁん、とんとん、してぇ！　もっと、あぁっ、いいのぉっ、はぁぁ、ああぁぁっ！」
馴染みきったオウルの男根はただ出し入れを繰り返すだけでマリーの弱い部分を擦り上げ、嫌でも己の身体が彼専用のものであると思い知らされる。
「あぁっ、イク、イっちゃう、おうるさま、わたし、イっ……」
まるで螺旋階段を昇るかのように彼女はどこまでも昂っていき、それが頂点へと達しようとした、その一瞬前。
「……え……？」
オウルの動きは突然止まり、マリーは己の腹の中に馴染みのある感覚を覚えた。どくどくと脈打ちながら、じわじわと何かが広がっていく感触。
膣内に精が放たれた感触だった。
「え、おうるさま、わたし、まだイってない……よ……？」
オウルとの性交で、こんなことは初めてだった。
彼は必ず、先にマリーを絶頂に至らせてから自らも達する。
少なくとも同時に、多い時なら十回も二十回もイカされてからようやく射精してもらえることすらある。

「おうるさまぁ……」
絶頂寸前まで高められた身体は燃えるように熱く、マリーはオウルに腰を押し付けるように背を反らす。しかしオウルはマリーの尻を掴んで彼女の身体を押し留めた。
そうまでされれば流石のマリーも、オウルが単に嫌がらせや戯れでそうしているわけではないと気づく。
「ごめんなさぁい！　ちゃんと、ちゃんと言うこと聞くから、許してぇ！」
「さっき、お前、誓わなかっただろう」
勝手に視界から離れないと誓うか。
オウルがそう尋ねた時、マリーは『言いつけを守る』と宣言した。
一見何気ないやり取りのように見えるが、彼らはどちらも魔術師である。
そこにはただの口約束以上の意味があった。
「誓うか？　勝手なことはせず、俺を欺くようなこともしないと」
自分の迷宮の中であればともかく、これから進むのは危険のある場所だ。
そこへ連れていく以上、しっかりと手綱を握っている必要があった。
「はいっ、ちかう、ちかいますぅ！　誓うから、おうるさまぁ……！」
「良かろう」
オウルの言葉と共に、マリーを縛り付けていた壁が積み木のようにばらりと崩れる。
そしてそのまま広がると、彼らを包み込むようにして小さな部屋を作り上げた。

「え、なんで、周り……？」
「当然だろう？」
オウルはマリーの望み通り、顔が見えるように膝の上に乗せて彼女の身体を抱き寄せる。
「声が漏れては困るからな」
「え、それってどう、あぁぁぁあっ⁉」
身体の中心を貫かれ、小さな部屋の中にマリーの悲鳴のような声が反響した。
「そら、まず一回目だ」
「あぁぁぁぁあああぁぁぁぁっ！」
まだ火のついたままの奥を容赦なく抉られて、マリーは簡単に気をやった。
「どんどんいくぞ」
「お、おうるさま、ちょっとまっ……ふぁっ、あぁあああ！」
余韻どころか絶頂のさなかに子宮口をこじ開けるかのように突き入れられる肉塊に、マリーは全身に力を込めてオウルにギュッと縋り付く。
「だめっ、それ、だめぇっ！」
「駄目も何も、お前が願ったことだろう？」
マリーの小さな身体はそのままひょいと持ち上げられて、空中で揺するようにして犯される。その度に、彼女は身体を震わせてオウルのモノを強く締め付けた。
「だ……めぇ……っ！　こわれ、ちゃ、うぅっ！」

「安心しろ」
オウルはマリーの耳元で、優しく囁く。
「何度壊れても、しっかり可愛がってやる」
言葉と共に注ぎ込まれる精液の感覚に、マリーは二度目の絶頂を迎えた。

5

「ん……ちゅ、んん……ん、む……」
小さな口が赤黒くそそり立つものをぱっくりと咥え込み、短い舌が淫猥な水音を立てながら脈打つ肉茎を舐め上げていく。
ふわふわとした金糸のような髪をかきあげて、跪きながら奉仕する様はまるで神に祈っているかのように神聖な雰囲気を纏っている。しかし、両手で硬く張り詰めた男根を擦りながら熱心に吸い付く表情はどんな娼婦よりも淫らだった。
「く……出すぞ……！」
オウルの言葉にマリーは答えず、ただ手と口の動きの速度を上げる。
素早くピストン運動を繰り返しながら、その指や舌先はオウルの弱いところを的確に擦り上げていた。
呻くような声と共に、マリーの口内に白濁の液が放出される。彼女はぷっくりと頬を膨らませて

それを受け止めながらも、手の動きは緩めず射精を促す。二度、三度と断続的に迸るそれを、彼女は全て口内に蓄えた。
射精を終えてからもマリーは更に竿をしごき立て、尿道に残った汁までも一滴残らず吸い出す。そして形の良いおとがいを上に向けて口を開き、そこに溜まった白濁の液を主に示す。それをごくりと嚥下すると、綺麗になった口内を改めて見せた。
「お掃除終わりました、オウルさま」
最後に丁寧に竿を舐め清めて、仕上げとばかりに先端に口付ける。
「うむ……」
「どうしましたか？」
眉根を寄せながら頷くオウルに、マリーは首を傾げた。
「いや、先程までわがまま放題だったくせに、いきなり随分と従順になるな、お前は……」
「もう、どうしろっていうんですかあ」
ぷうとマリーは先程よりも大きく頬を膨らます。もっともな意見ではあったが、あまりの急激な態度の変化にはかえって裏があるのではないかと疑ってしまう。
「これでも、ちゃんと反省したんですよぅ……」
マリーはオウルの一物を丁寧に服の中に仕舞い込み、パタパタと服から埃を払う。
「オウルさまがわたしのこと心配してそう言ってくれてることくらいは、わかってますから」
そしてぎゅっと腕を抱くと、にこにこしながらそう言った。

「……まあ、わかっているなら良い」
彼女を子供の頃から見知っているせいか、どうにもやりづらい。そう思いつつも、オウルは周りを覆う小部屋の床に触れる。すると小部屋はパタパタと折りたたまれて、元の小さな石の箱に戻った。
「そういえばこれ、何ですか？」
「遠征用に造った武器だ」
マリーはオウルの手のひらに収まった石の箱をしげしげと眺める。見た目は、ただの石の塊にしか見えない。縦横高さの長さが同じ立方体で、黒に近い灰色をしている。大きさはオウルの手のひらの上に乗ってしまう程度だが、厚みがあるため手の中に隠せそうにはなかった。
「見た目は、全然武器に見えないですね」
「だろうな。これはまあ、言ってしまえば小型のダンジョンだ。便宜上、ダンジョン・キューブと呼んでおる」
「……そのままだね」
「うるさい。名前などどうでもいいだろう」
咳払いを一つして、オウルはキューブの表面を指でなぞる。するとパタパタとキューブが展開して、通路の上に石の橋がかかった。
「そこは落とし穴だ。この上を歩け」
「おー、べんり！」

橋の上を渡り終えると、キューブは再び元の石の箱へと戻る。
「地味だけどとってもお役立ちな、オウルさまらしい武器ですね！」
「地味は余計だ」
自覚があるのか、オウルは渋面を作りながらもキューブを懐に仕舞い込んだ。
「でもでも、色々使い方工夫できそう！　わたしにも使えますか？」
「迷宮魔術を覚えればな」
「おぼえます！」
マリーはぐっと、拳を握りしめる。
「ならば少し、教えてやろう」
作られたばかりのこの迷宮に魔物の類は存在せず、自動発生した程度の罠をオウルが見逃すこともない。まだまだ道のりは長いと見て、暇つぶしにオウルは講義を始めることにした。
「まず、魔術の行使の仕方に三種類あることは知っているな？」
「はいっ。呪文を唱えて使う詠唱系とー、魔法陣を描いて使う紋章系とー、手で印を組んで使う形象系！」
ピンと手を挙げて言うマリーに、うむとオウルは頷く。
「迷宮魔術はその中で紋章系に分類される」
オウルは指先に魔力の光を宿し、空中に複雑な紋章を描いていく。
「綺麗に描くの難しいし、描くのに時間もかかるから凄く面倒臭い奴ですよね。あれ？　でもさっ

きオウルさま、殆ど一瞬で発動させてましたよね？」
「そう。そこが、迷宮魔術の特徴だ」
我が意を得たりとばかりに満足気に頷くと、オウルは先程作った光の紋章を指し示す。
「これに魔力を注ぐとどんな魔術が発動する？」
「ええっと……あれ？　三個に増える？」
「そうだ」
オウルが紋章を指で突くと、光は複雑さを増した三種類の紋章に増える。
「ではこれを新たな紋章として発動させるとどうだ」
「え、ええっと……ここがこうで、こうなって、こうだから……あ、また増えて八個になる⁉」
「その通りだ。三重紋を暗算で読み解くとは、中々やるじゃないか」
紋章は組み合わされば組み合わさるほど、その効果は加速度的に複雑化していく。三重紋を読み解くのは、単一の紋章を読み解くそれの八倍は難しい。
「で、この八重紋を発動させるとどうなると思う？」
「そんなの、わかるわけ……ううん。ええと、多分だけど、十五個に増える？」
「正解だ。よくわかったな」
八重紋ともなればマリーに読みきれるわけがなく、それがただの当て推量であることは明らかだ。しかしそれでも当ててくるのが、マリーの恐ろしいところだった。
「で、それを発動させるとようやく目的の魔術の効果が発揮される。これが、迷宮魔術だ」

まるで迷宮のように入り組み、圧縮された紋章系魔術。
それこそが、オウルの作り上げた迷宮魔術という術式の真髄だった。
十五に増えた紋章を突けば光は見る間に広がっていって、迷宮の通路を舐め上げていく。
そのあとには、キラキラと輝く光の塊が所々に残っていた。
「わぁ……綺麗」
「触るなよ。それが罠のある場所だ」
案の定うかうかと触りに行くマリーの首根っこを、オウルは猫のように引っ掴む。
「……あの、ものすごく、沢山あるんですけど」
「侵入者は全ての罠に引っかかるわけではない。むしろ気づくこともなく素通りすることが殆どだ。故に、仕掛けてある罠全てを可視化すればこうなる」
その数はマリーが思っていた以上で、どの方向に視線を向けても光が瞬いている。
今まで何気なく進んでいた道にもいくつもあって、彼女は自分がどれだけ運良く歩いてきたのかを思い知った。
「床や壁にあるのはともかく、あの天井のとかは引っかかる人いるんですか……？」
「床や壁にだけ罠があるなら、天井を歩けば安全だろう。そう思う手合への罠だ。勿論、空中を飛んでも引っかかるようにしてあるから、気をつけろよ」
マリーはぎゅっとオウルの腕にしがみつきながら、ふとあることに気づく。
「この罠……っていうか、迷宮自体も、さっきみたいな紋章の展開で作られているんですよね？」

「他の術式も組み合わせてはあるが、基本的にはそうだな」
その場で多重展開する紋章を作り上げたオウルの技は、もはや神業と言う他ない。
それでも十五重紋くらいなら、綿密に準備と計算をして用意すればマリーでも再現できそうな気はする。
しかしこれほどの迷宮を自動的に作り出す魔術というのがどのくらい複雑なのかということになると、彼女には想像もつかない世界の話だった。
「最終的に、何重くらいの紋章になるんですか？」
「途中で別々の紋章に派生して別々の魔術になるから、見た目ほど複雑ではないぞ。合計するなら、この規模なら数億といったところだろう」
「おっ……」
さらりと言ってのけるオウルに、マリーは言葉を失う。
「オウルさま、やっぱり変態……」
「失礼なことを言うな」
渋面を作りながらも、元の調子に戻ってきたマリーに、オウルはどこか安堵を覚えた。

6

「それじゃあ、いきまーすっ」

「ああ」
腰の剣を二本抜いて構えるマリーに、オウルは頷く。
「せいっ！」
彼女が剣を同時に突き出すと、衝撃波が渦を巻いて迷宮の天井を貫き、ぽっかりと穴を穿つ。
「よし。今だ、登れ！　そう長くは保たんぞ」
同時にオウルがキューブを操り、円筒形の小さな塔と梯子を作り出して、修復されゆく天井を抑えながら地上への道を作り上げた。
「……あっ」
「どうした⁉　地上部分に何か問題でもあったのか？」
梯子を登る途中、マリーは不意に動きを止めて、背後のオウルを見下ろす。
「さっきオウルさまがマリーの中に出した精液、垂れてきちゃった……」
「いいからさっさと登れ、愚か者！」
ぽっと頬を染めて恥ずかしげに呟くマリーに、オウルは思わず怒鳴った。

「こっちはあんまり、ダンジョンって感じはしないんですね～」
「いや、よく見ろ。ただの森に見えて、構造そのものは普通のダンジョンと変わらん。そうは見えないかも知れないが、これは壁だ」
きょろきょろと辺りを見回すマリーに、オウルは複雑に絡みあった樹の枝を指差した。

「でもただの木の枝なら打ち払っちゃえば通れそうな気がしますけど……あっ」
剣を振るってその枝を切り裂こうとすると、細く脆く見えた枝の中程までを切り裂いて剣は止まる。
「さっさと抜け！」
オウルの怒声に慌ててマリーが剣を引き抜く。枝はあっという間にざわざわと伸びて、マリーのつけた小さな傷はすぐに消えてしまった。
「魔力が通った枝だ。見た目通りの強度なわけがないだろうが。壁の破壊は最も恐れるべきことだから、当然対策もしてある」
「はぁい……ごめんなさい」
しょんぼりと項垂れるマリーの頭を、ぽんと撫でる。
「あれ？　でも、天井っていうか地面は簡単に壊せましたよね？」
既に修復されて消えた穴を見つめて、オウルの手のひらを頭に乗せたままマリーは首を傾げた。
「そうだな。あれは一種の隠し通路だ。どこでも壊れるわけではなく、ここだけが簡単に壊れるようにできている。それを見極めるのもダンジョンマスターの資質だ」
「わたしもずっとダンジョンに暮らしてたのになあ……」
「当たり前だ。お前と俺とでは年季が違う。大体、お前はダンジョンマスターではなかろう」
そんなことよりもだ、とオウルはマリーの背中を押す。
「恐らくこのダンジョンはここからが本番だ。地下は作ったばかりで大した罠すらなかったが、森

の中には元々自生していた魔物もいるはずだ。油断するなよ」
「はーいっ！」
まったく、返事だけは良いんだが。とオウルは内心嘆息する。
彼女の能力自体は、非常に高い。純粋な戦闘能力という意味ではもはやオウルよりも上だろう。特段天賦の才があったわけではないが、迷宮に住む実力者たちが鍛え上げたのだ。弱いはずもない。だが迷宮の中で大切に育てられたが故に、実戦経験というものが全く足りていなかった。
「そら」
中でも特に問題なのが、
「言った傍からお前は一回死んだぞ、マリー」
ダンジョンへの警戒心のなさだ。
「えっ、わっ、なにこれ、魔物⁉」
マリーは木の幹にぎょろりと生えた目玉に驚き、次にその枝が槍と化して自分の腹まで伸びているのに驚く。
「やはり海を越えると見たことも聞いたこともない魔物がいるものだな」
感心したように呟くオウルにも木の枝が二本、左右から素早く伸びる。だがそれは彼の身体に触れる直前に、半ばから断たれて地面に転がった。
マリーが両手に二本の剣を持ち、同時に切り捨てたのだ。
「こっちはそんなに硬くないね」

彼女を警戒するように、木の枝がざわりと蠢く。更に四本の枝が触手のようにしなり、同時にマリーを狙って突き出された。マリーは二本の剣を盾のように構え、攻撃を受け止める。彼女の動きが止まった瞬間を狙って、地面から根が突き出した。

「わあっ。そっちからも来るの!?」

予期せぬ攻撃に、マリーは目を丸くする。

その瞳を貫く勢いで飛び出した根は、直前で動きをピタリと止めた。

「あーびっくりした。ちゃんと目が弱点で良かったー」

木の化物の目玉には、剣が二本突き刺さっていた。マリーの扱う四刀の三本目、四本目だ。

絶命した化物の後を追うようにして、木の枝もバラバラと崩れ落ちる。

奇しくも相手の攻撃を受け止めて追加攻撃を行うという狙いはどちらも同じ。ほんの僅かな差で、マリーの方が早かった形だ。

「ありがとです、オウルさま」

マリーの腹に巻き付いた石の帯がするりと解けてキューブに戻る。オウルが初撃を防がなかったら、彼の言葉通り何もわからないまま死んでいただろう。

「まさか木が動き出すだなんて……オウルさまは知っていたんですか？」

「いいや。俺も気づいたのは動き出す直前だ」

未だにバクバクと鼓動する胸を押さえながら尋ねれば、老魔術師は首を横に振る。

「ダンジョンではあらゆるものを警戒せねばならん。お前は異常に気づくのも遅すぎなら、気づい

てからの対応も遅すぎる」
「うぅー……」
いつになく厳しいオウルの意見に、マリーは眉根を寄せた。
「わかりました。もっと、気をつけます」
しかしすぐに立ち直り、彼女はきりりと表情を引き締める。
「これからは、もう絶対に油断しないんだから！」
そう言い放つ彼女の背後で、樹という樹がぎょろりと目を開けた。

7

「これは、まずいな」
流石のオウルも目を見開いて、キューブを取り出しながらマリーを抱き上げる。
「ふぇっ、な、こんなところでですか？」
「馬鹿な勘違いしてないでしっかり掴まってろ！」
キューブから伸びた石畳を踏みしめると、オウルの身体は高速で道の上を滑るように移動していく。一瞬後、無数の枝槍がマリーの髪を数本引きちぎりながら地面に突き刺さった。
「やあん、髪が！」
「命の心配をしろ。来るぞ！」

道の上を滑っていくオウルたちを迎え撃つように、前方で木々が枝を広げる。
「油断しないって言ったばっかりなのに、もぉー！」
マリーは叫びながら腰に下げた二対四本の剣を引き抜いた。両腕で剣を二本操り、魔術でもう二本を操る異形の剣術。だがそれは驚くほどの破綻のなさで、的確に彼らを襲う木の枝を切り落とした。
剣を扱う流派はそれこそ星の数ほどあるが、二本の剣を用いて振るうものとなると数えるほど。ましてや四刀流などどこにも存在しない。人間には腕は二本しかないのだから当然だ。
だが独自に磨いたにしては、マリーの剣技はあまりにも洗練されていた。長きに渡って無駄を削ぎ落とし、有効な動きだけを磨き抜いた技。四本の腕を振るう悪魔の戦い方を、誰よりも近くで目にし学んだ剣術だった。ダンジョン探索は落第だが、戦闘に限って言えば十分使い物になりそうだ、とオウルは値踏みする。
「よし、マリー。このまま突っ切るぞ」
「え⁉　でも……！」
オウルが示したのは特に木々が密集する行き止まりの方向だった。
道の左右からの攻撃であればいくらでも凌ぐ自信があったが、三方を囲まれた状態となると少々厳しい。ましてや行き止まりで、背後に回りこまれたら流石に対処しきれない。
「案ずるな。全ての剣を前に向け、全力で壁を切り開け」
「……全力って、全力で？」

「そうだ」
オウルが頷いてやると、マリーは目を閉じ、すっと開く。彼女のサファイアブルーの瞳が、右だけ赤く輝いた。
四本の剣が束ねられ、まるで一枚の刃のように連なって振り抜かれる。先程僅かな傷を与えることしかできなかった木の壁は、まるで紙のように容易く切り開かれた。
オウルはマリーを木々の攻撃からキューブで守りながら、彼女が空けた穴に飛び込む。転がりながら壁の向こうの空間に滑り込むと、オウルの予想通り木々の攻撃は止まった。
「よし、よくやった。流石に効果覿面だな」
オウルはマリーを抱き起こし、しげしげと彼女の空けた穴を眺めた。ぽっかりと空いたそれは、再生すらできずに開いたままになっている。
世界で唯一の、彼女の特異性――聖女メリザンドと呪術的な双子であるが故に使える、法術を乗せた一撃によるものだからだ。
法術には、魔術を打ち消す作用がある。魔術による解呪（カウンター）と違って、魔力さえ使っていればどんなものでも問答無用だ。勿論それは迷宮の壁とて例外ではなく、法術を使えば彼女が言った通りただの木の枝でしかなかった。
「襲って……こないですね。行き止まりに侵入する時も攻撃は少なかったし」
油断なく剣を構えながら、マリーは不思議そうに声をあげる。
「あいつらの根は地面にしっかりと繋がっている。移動はできん。純粋に防衛用の罠のようなもの

だな。それに、壁になっている木と動き出す木は別物だ。壁に囲まれた部分はかえって安全というわけだ」

当たり前のように解説するオウルに、マリーは己の至らなさを痛感した。どれだけ油断しないよう意気込んでも、オウルの視野はあまりにも広くてついていくことさえできない。これではただの、足手まといだ。

「ではこの後はお前の出番だ。期待しているぞ」

だから、オウルに肩を叩かれそう言われて、マリーは心底驚いた。

「わ、わたし？」

「この先に、恐らくこの迷宮の核がある」

オウルは目の前の、わだかまった茨の壁を指差す。

「これほどの魔力を保有する森だ。相当な力を持った主がいるのは想像に難くない。本来ならばじっくりと準備を整えるところだが、お前なら問題ないだろう」

純粋な真っ向勝負ならばマリーは既に相当な域にある。度胸も十分だ。

ならば他を自分が補えば、この規模の主には十分な戦力だろう。

オウルはそう判断した。

「頑張ります！」

マリーは俄然張り切って、茨の壁を切り開く。それが正規の侵入ルートだったのだろう。法術を使わなくとも、壁は容易く破壊できた。

「えっ？」
半球状に形作られた茨の部屋の中央に、それはいた。
その姿に、マリーは声を漏らしてぱちぱちと瞬きする。
四方八方から伸びた数本の蔓草が、中央にダンジョンシードを固定している。そしてその中で、小さな生き物が丸くなっていた。
「これが……主？」
「その、ようだな」
オウルも困惑を隠しきれない様子で頷いた。
そこにいたのは、どう見ても。
「赤ちゃんじゃない」
生まれたばかりの赤子であった。

8

「これも罠ってことですか？」
「……いや……」
油断なく剣を構えるマリーとは裏腹に、オウルは大胆に赤子へと近寄っていく。
手のひらに収まる程度の大きさだったダンジョンシードは、赤子がすっぽり収まってなお余裕が

ある程度にまで膨れ上がっていた。
それはつまり、内部に高密度の魔力を閉じ込めている証拠だ。ダンジョンコアを元に設計したダンジョンシードは、内包する魔力に応じてその大きさを肥大化させる能力を持っている。
だが、その内部には液状になった魔力は見られない。つまりこの赤子自体が、高濃度の魔力だということだ。そしてその正体が何であれ魔力である以上、ダンジョンシードの中からはオウルの許可がなければ出てくることはできない。
他に敵らしき姿も見えず、オウルはダンジョンシードに触れる。その途端、赤子がぱちりと目を開けてオウルの姿を見た。
髪と同じ色の、緑色の瞳がじっとオウルを見つめる。感情の読めない、野生の動物のような瞳だった。赤子は攻撃してくるでも、話しかけてくるわけでもなく、ただひたすらにオウルを見る。
すると徐々にその表情は歪み始め、ひくひくと息を吸ったかと思えば、突然泣き始めた。
「何だ？　一体こいつは何なんだ？」
ただ泣いているだけだ。その泣き声に何らかの魔力が含まれていたり、音波で攻撃したりするわけでもない。オウルが困惑していると、マリーが剣を鞘に収めてダンジョンシードを覗き込んだ。
「オウルさま、この子、外に出せますか？」
「恐らくは出せるだろうが……」
「じゃあ、出してあげてください」
有無を言わさぬ彼女の口調に、オウルはダンジョンシードを掌握する。

一瞬にして迷宮はオウルの管理下に置かれ、彼は魔力を取り出す時の要領で赤子をダンジョンシードの中から引き出した。

途端、赤子は火がついたように更に泣き出す。その両目からは大粒の涙がぽろぽろと溢れだし、大きく口を開け、両手足をジタバタさせて泣き喚く。まるで、己の存在を精一杯世界に認めさせようとしているかのようだった。

「大丈夫よ。大丈夫。いい子、いい子」

マリーはオウルの手から赤子を受け取ると、手慣れた様子で抱きながらゆらゆらとその身体を揺らす。

「オウルさま、多分この子、ただの赤ちゃんだよ。女の子だね。産着か何か着せてあげないと風邪引いちゃう」

「む……とりあえず、これを使え」

産着の手持ちなどあるわけもなく、オウルは外套を脱いでマリーに手渡した。マリーは手早く赤子をそれで巻いて抱き直す。

「いやに手慣れているな」

「アリスたちやアークのお世話、結構してたもの」

マリーにとって、オウルがフィグリア王家の女たちに生ませた子やユニスとの間の子は可愛い妹分、弟分である。幼い頃から何かと面倒を見ていたから、赤子の扱いは慣れた物だ。

「でも何でこんなところに赤ちゃんがいるんだろ」

マリーの問いに答えるすべは、オウルでさえも持っていなかった。

「はい、持ってきたよー。産着と、おしめと、ベビーベッドと、その他諸々」

「すまんな」

小さなベッドを担ぎ上げ、転移してきたユニスをオウルは労った。

「転移したら船の中じゃないしマリーはいるし赤ちゃんはいるしで、びっくりしたよー」

「それをびっくりした、程度で済ませるんだから、ユニスは度量が大きいわよね」

けらけらと笑うユニスに、リルは憮然としながらぼやく。

ようやく迷宮から抜け出せたと思えば、オウルと共にマリーが赤ん坊を抱いていたのだ。リルの驚愕ぶりは並大抵のものではなく、一から十までオウルを問い詰めなければ気がすまなかった。

ユニスがスピナを伴ってオウルのもとに飛んできたのは、ちょうどリルが不承不承ながらも納得した時のことだ。距離も結界も無視して転移する能力を持つ彼女は、一日一回、オウルのもとにダンジョンを往復して必要な物品などを届けている。

ローブに包まれた赤子を見た途端、ユニスは事情を殆ど聞くまでもなく、ダンジョンに取って返して赤ん坊に必要なものを取り揃えて帰ってきたのだった。

「やはり、純粋な人間ではありませんね。かといって精霊と言うには存在がしっかりしすぎています。人造生命に近い気はしますが……」

赤ん坊の顔を覗き込んで難しい表情をしているのはスピナだ。

こと人造生命に関する分野においては、彼女はもうオウルを凌駕している。
だがそんな彼女でも、赤子がどういう存在なのか断定することはできないでいた。
「何者かが俺より先に迷宮の中心部に入り込んで、魔力を使ってダンジョンシードの中に人造生命を作っていった、と？」
「そう……なりますね」
頷きつつも、スピナの表情はそんなことはありえないと言っている。
オウルとしても同感だった。
「しかし、ダンジョンシードを通じてダンジョンから魔力を集めているのは確かなようです。恐らく、ここを離れては生きていけないでしょう」
「厄介なことになったものだな……」
オウルは頭痛を堪えるように額を押さえる。
と、周りの視線が自分に向いていることに気がついた。
「安心しろ。どこの誰の子かは知らんが、邪魔だから殺せなどとは言わん」
オウルがそう言うと、女たちは一様にほっと笑顔を浮かべた。自分の子でもないのに情の深い連中だ、とは思うが、その意に添ってしまう辺り自分もだいぶ感化されている。
「じゃあ、名前つけてあげなきゃね」
マリーは赤子を抱き上げて、あやしながらその顔を見つめる。
新緑色の瞳はあっちこっちにどんどん興味を移して揺らぎ、見ていて飽きるということが全くな

い。
「ならば、マリーがつけるといい」
「わたしがつけていいんですか？」
きょとんとするマリーに、オウルは頷く。
「その子を最初に見つけたのは、お師匠様とマリーですから」
「随分マリーに懐いてるみたいだしね」
「オウルはあんまりネーミングセンス良くないしねえ」
「煩い。余計なお世話だ」
スピナたちも口々にそう答えるのを見て、マリーはもう一度赤ん坊を見つめた。
「……ねえ、ソフィ」
「だから、師姉と呼べと言っているでしょう」
相も変わらず魔術師になる前の名で呼ぶマリーに、スピナはいつも通りに呆れ声をあげる。
「じゃあ、姉さん」
しかしまっすぐ視線を向けてそう呼ぶマリーに、スピナは瞠目した。
そんな風に呼ばれたのは、初めてだった。
「その名前を、この子にあげてもいい？」
「……私の名は、スピナ。オウル様の一番弟子、ネリス・ビア・スピナです。捨てた名をどうしようと、構いません」

「ありがとう！」
スピナが素気無(すげな)く答えると、マリーはぱあっと笑顔の花を咲かせる。
「あなたの名前は、ソフィアよ」
マリーは赤子を――――ソフィアを空に掲げるように抱き上げて。
「わたしの知ってる中で一番強くて、気高くて、綺麗な人の名前なんだからね」
かつて呪いに満ちた名を、祝福をもって贈った。

幕間　愛妻たちの歓待を受けましょう

「寝かしつけたよー」
「お疲れ様ー。あの子、寝付き良いんだね」
急ごしらえの寝室にひっそりとやってきたマリーを、ユニスが労う。
「あれ、オウルさま、待っててくれたんですか？」
「流石にお前の子守唄を聞きながらそういう気分にはなれん」
服を着たままベッドの上にいる四人に首を傾げるマリーに、オウルは渋面を作った。
「防音対策できないんですか？」
「できないわけではないが、コストがかかりすぎる。それに何かあった場合、全く声が聞こえないでは問題があろう」
寝付いたソフィアはスピナとリルの分身が見てくれてはいるが、何せ素性も何もわからない赤ん坊だ。オウルにとっては当然の備えというつもりだが、それを赤子への心配と受け取ったマリーは破顔して彼に擦り寄るようにベッドの上に乗った。
「じゃあ、あの子が起きちゃうから、声あんまり出さないようにしないと……ですね」

シンプルな作りのベッドがぎしりと軋む。別にマリーまで相手にする必要はないのだが……という言葉を、思わず飲み込んでしまうような色香があった。
「そうだな。ともかくも新大陸に辿り着き、拠点を作り上げた記念だ。今日は四人纏めて相手をしてやる」
夫の言葉に、妻たちは密やかに嬌声をあげた。
本来なら、相手をする必要があるのはオウルに魔力を渡すスピナだけだ。
後は強いて言えば、その魔力を貯蔵しておくリルだろうか。
無尽蔵に魔力を使える龍脈の中とは違い、遠く離れたこの地ではオウルの使える魔力は極めて限られている。そんな状態でまさか情事のために魔力を注ぎ込むわけにもいかず、自然、精力は己の肉体頼みだ。
いくら魔王といっても肉体的な能力には限界があり、魔術の補佐なしでは無限の精力を誇るというわけにはいかない。
「えっと、オウルさま、大丈夫なんですか？」
ましてや彼は日中にマリーに数度放出しているのだ。
唯一それを知る彼女は心配そうに尋ねる。
「四人相手となると確かに少し骨が折れるな」
オウルは両腕一杯に愛妻を抱き寄せながら、
「せいぜい、三回ずつが限界かも知れん」

耳元で囁くようにそう嘯(うそぶ)いた。
「夫を奮い立たせるのも、妻の仕事よね」
リルが妖艶に笑みを浮かべ、己の豊かな膨らみを強調するように持ち上げながら、オウルの股間をついと指先で撫で上げる。何気ない動作に見えて、そこは淫魔の技である。その一撫でで、オウルのそこはあっという間に硬く反り立った。
「……そういえば、マリーとスピナがダンジョンに来たばっかりの時も、この四人でオウルを起こしたっけ」
「よく覚えているな、お前は」
ユニスに感心半分、呆れ半分で言いながら、その時の光景を再現するようにオウルは寝台の上に横たわる。すると左右からユニスとスピナが、脚の間にマリーが潜り込み、リルがオウルの上に覆いかぶさるようにして宙に浮いて、舌を寄せ合いそそり立つオウルの男根を舐めしゃぶり始めた。
しかしその威力は、以前とは全く異なるものだった。
何せ彼の弱いところを知り尽くした若妻たちの舌技だ。ユニスとスピナの舌がぎゅっと竿を挟み込んで扱き立てたかと思えば、絶妙なタイミングでリルが先端を口に咥え込み、同時にマリーは精の詰まった袋をやわやわと揉み撫でながら付け根からじっくりと舐め上げていく。
二人の頭がぶつかりそうになったところでリルは男根の先端を唇で撫でながら露出させる。そして四本の舌が雁首をなぞり、ちろちろと舌の腹で傘を弾くように素早く交互に舐められた。
「ぐ、うっ……」

彼女たちの見事な連携に呻き声をあげつつも、オウルは何とか射精の衝動を堪え切る。
「ご主人様ったら無理に我慢しなくってもいいのに。じゃあ、こうしちゃうんだから」
それだけで脳髄が蕩けてしまいそうなリルの忍び笑いと共に、柔らかな感触で剛直が包まれた。リルの背中で遮られ直接見ることはできないが、何をされているかははっきりとわかる。四対八つの乳房で、オウルのものは文字通り四方八方から押し潰されるように挟まれているのだ。以前は試みることもできなかった技だった。
リルの膨らみは大きさは言うに及ばず、その柔らかさといい張りといい、極上と言うべきものだ。ただただ男を悦ばせるためだけにあるその器官はオウルのペニスにしっとりと張り付いて、触れるだけで達しそうなほど。
人外の肉体という点では、スピナも負けていない。何せその身体は半人半スライムである。乳房はどこまでもぐにぐにと形を変え、男の形に歪んでその身を捧げる。そのひやりとした肉は、熱く滾る肉棒の熱を更に煽るかのようだった。
だがその二人とて、純粋な柔らかさという点ではユニスに一歩譲る。授乳を終えたばかりの彼女の乳房は張り詰めていた乳を失ってほぐれ、その柔らかさといったら崩れない水そのもののようだ。
そんな柔らかな三対の乳房に囲まれて、発展途上のマリーの胸はまだ薄く青く固い。しかし柔肉に押さえつけられ、その硬く尖った先端やなだらかな胸元が敏感な裏筋に擦り付けられる感触は筆舌に尽くし難いものがあった。
そこに更に、女たちの舌技が加わる。ふりふりと誘うように目の前で振られる尻尾に釣られるよ

うに、オウルはリルの尻肉を鷲掴みにした。
「あぁん」
打てば響く鐘のように、リルは甘く媚びた声をあげる。
男を咎めながら、しかし同時にそれを許す女の声だ。
とうとう堪え切れず、オウルのペニスから噴水のように白濁の液が吹き上がった。
「あん、勿体無い」
「えへへ。たくさんでたね、オウル」
「今お清めいたします、お師匠様」
「あっ、ずるい、ソフィ……じゃない、姉さん、わたしもー」
娘たちは嬌声をあげながらそれを浴び、啜り、舐め取っていく。そんな情景に、オウルの一物は萎えるどころかますます硬く反り返った。
「じゃあまず、わたしからね」
リルはオウルの手をとって彼の上半身を引き起こすと、彼の腰に跨がるようにしてふわりと浮いた。いわゆる対面座位の格好に近いが、そそり立つ剛直は彼女の入り口に軽く押し当てられるだけで、中に入れる気配はない。
「何を……」
している、と問おうとして、未知の感覚がオウルを襲った。
するりと彼の男根に巻き付いているのは、リルの尻尾だ。

まるで蛇のように伸びたそれは、しかし指のようにしなやかで、それでいて骨や筋とは無縁の柔らかさを持っていた。
「どう？　気持ちいい？」
リルはオウルの両手を引いてそのたっぷりとした双丘に押し当て、上から己の手のひらを重ねる。そうしながら、尻尾はオウルのモノを締め上げた。
「む、ぅ……」
その快楽に、魔王は思わず呻き声をあげる。
柔らかな尾に包まれた肉塊は絶妙な力加減でずりずりと擦り上げられ、まるで乳房でできた指で握られているかのようだ。先端には潤いを帯びた膣口がまるでキスをするかのように押し当てられて、そこから溢れる蜜を浴びた尾は更に快楽をいや増していく。
だというのに、その中を求めて腰を突き出せば、その分だけリルは腰を浮かせてふわりと逃げるのだ。腰を掴んで無理矢理にでも挿入してやりたいが、淫魔の柔らかな乳房に捕らえられた両手は軽く上から押さえられているだけで、魔王の精神力をもってしても吸い付いたように離れない。
「沢山ビュービュー精子出していいからね。全部受け止めてあげるから」
嬉しげに笑うリルの表情は精を絞りとる淫魔ではなく、愛しい男に微笑む乙女のそれだ。だが、だからといってされるがままというのは魔王の矜持が許さなかった。
ぐっと手のひらに力を込め、左右の先端を一つに纏めて口に含む。
「あぁっ、両方……っ！」

リルの鳴き声は脳髄が蕩けそうなほど甘く、オウルの限界はまた一段と近づく。だが彼は臆することなく、果敢に攻めた。

硬く屹立した乳首をコリコリと軽く食み、指先は柔肉を繊細に捏ね回す。

互いに、互いの弱いところは知り尽くしていた。

「んぅっ……あ、そこっ、だめぇっ……！」

余裕をなくしたリルの声色に、オウルは彼女の中に一気に突き入れる。

「あぁっ！」

虚を突かれ、リルは中心を貫かれる感覚に高く鳴いた。そのままベッドの上に押し倒されて、男の欲望を叩きつけられるように犯される。硬く太い肉槍が荒々しく彼女の秘部に突き込まれる度に呼吸が止まるほどの快感が背筋を走り、指が彼女の胸を歪ませる度に下腹が甘く疼いた。

知らずリルの形の良い脚がオウルの腰に回されて、精をねだるように尻が押し付けられる。全身で抱きついてくる妻の頭に手を回すと、オウルは彼女に唇を重ねた。

「〜〜〜〜っ！」

途端、リルの膣口がねじ切らんばかりに剛直を締め上げる。オウルはその媚肉を無理矢理にこじ開けて、彼女の奥へと精を放った。どくり、どくりと肉塊が脈打つ度にリルは身体を震わせて、己の膣内を満たしていく熱い迸りを受け止める。

「はぁ……」

唇から銀の糸を伝わせながら、リルは恍惚の息を漏らした。

「もう。してあげるつもりだったのに」
最後にもう一度軽く口付けて、リルはオウルの胸元をつんと指で突いた。
「じゃあ次はあたしね」
ユニスはそう言って、ベッドの上に四つん這いになってオウルに尻を向ける。
「来て、オウル」
「珍しいな」
彼女の体勢に疑問を抱きつつも、オウルはユニスの腰を撫でる。リルとの情事を見て興奮したのか、そこは前戯の必要もないほど濡れていた。
ユニスは基本的に正常位や対面座位といった互いの顔が見える体勢を好む。このように後ろからをねだるのは非常に珍しい。だがオウルはこの体位でユニスを犯すのが嫌いではなかった。
彼女のよく鍛えられた太股のしなやかな筋肉は、触れてみれば男のそれとはまるで違って驚くほどに柔らかい。それでいて、脂肪にはないハリのある弾力に満ち満ちていて、いつまでも撫で擦っていたくなるような魅力を備えていた。
その脚を支える腰つきは、慎ましやかな胸元と違ってどっしりと大きい。それでいて、垂れるようなだらしなさとは全くの無縁の、若い瑞々しさに溢れた尻だった。
それをほしいままにしながら、オウルは彼女を後ろから貫く。たっぷりと潤いを帯びたそこはするりと奥まで肉槍を咥え込み、ユニスはんっと小さく声をあげた。
「んっ……ぅ、ふ、ぅ……ぅん……っ」

わざと乱暴に突けば小柄な彼女の身体は前に後ろに揺さぶられ、ポニーテールにしたふわふわの赤毛が目の前でポンポンと跳ねる。その度に、堪え切れず漏らしたユニスの嬌声がオウルの耳朶に触れた。

「む……？」

その時、オウルは違和感を覚えて声をあげた。ユニスの膣の中で、何か別のものがオウルの男根に触れている感触がある。だがそれはどこか見知った感覚で、不愉快な類のものではなかった。何か柔らかなものが先端の筋をなぞりあげ、膣口とは別の環状の圧力が雁首を弾くように締め付ける。

「これは……舌か！」

「ほうらよ。ひもひいい？」

自由自在に転移する英霊としての権能――――その応用。

彼女は口内と膣内の空間を共有させて、上下の口で同時にオウルのものを咥え込んでいた。

器用なことをするものだと思いつつも、もたらされるその快楽にオウルは唸らざるを得ない。

膣口できゅっと根元を締め付けつつも、唇が亀頭を撫で上げて、舌で先端をなぞりながら全体をちゅうと吸い上げる。それはどんな名器でも生み出せない快感だ。

そして何よりオウルを興奮させたのは、その情景。英雄が前後から男に犯され嬲られる様だった。他の男に触れさせるつもりは毛頭ないが、どちらも自分であるならそれは征服欲を満たす要素でしかない。

「んぶっ、ん、んうっ……」

くぐもった嬌声を漏らしながらも、ユニスはわざとジュポジュポと音を立てながらオウルのペニスを舐めしゃぶる。しとどに濡れた秘裂と口元、男を咥え込んだ二つの口から淫猥な音を鳴らす少女の姿に、オウルの劣情はいやが上にも昂っていく。

「いくぞ……！」

「んんんっ」

射精と同時、ユニスは頬をすぼめるほどの強さで肉槍に吸い付いた。まるで子宮と取りあうかのように、オウルの精を吸い上げ嚥下していく。断続的に吐き出される白濁を飲み干して、更に唇と膣口とで扱き立てながら肉茎の中に残った精液を最後の一滴まで絞り出す。

「お師匠様、次は私たちに」

「ください！」

息つく暇もなく誘ってきたのは、スピナとマリーだ。

互いに抱きあうように折り重なり、脚を広げて秘部を晒していた。

絡みあう黒と金の髪は、例えるならば月と太陽。それぞれの美しさを高めあうかのようだ。

「ではいくぞ」

まずは上側、マリーに覆いかぶさるようにしているスピナの方へとオウルは己自身を押し当てた。出会って以来、十年以上に渡って殆ど毎夜のように可愛がってきた身体だ。オウルの形に作り替えられたその穴は、殆ど力を込めなくともするりと彼を受け入れた。

奥まで突き入れればピタリと嵌まるような感覚と共に収まる。

だが、それを引き抜こうとすれば一転して猛烈な反抗が現れた。逃すまいとするかのような強烈な締め付け。

それを振り切って、すぐ下のマリーに突き入れる。まだ幼さを多分に残す彼女の中は、やはりまだ青くキツい。だがそれをこじ開けるように突き込んでしまえば、柔らかな膣壁の感触がオウルをふわりと包み込んだ。

何もかもが対照的で、それでいてそれぞれに美しい姉妹を同時に味わう。男としてこれ以上に滾る状況もそうはないだろう。競いあうように鳴きあう二人の喘ぎを楽しみながら、オウルは己のものが二本欲しいとさえ思った。

と、その思いに応えるかのように、スピナの腰が軟体化して形をなくす。そしてマリーの腰をすっぽりと覆うようにして半透明の下半身が重なった。

軟体と肉体の狭間にあるのか、スピナの尻を触れば柔らかくどこまでも形を歪めるが、スライム特有のべたついた感触はしない。乳房のように柔らかな尻肉を揉みしだきながら挿入すると、ユニスの時とはまた違った未知の快楽がオウルを襲った。

スピナの膣壁がオウルの竿をすっぽりと包み込み、先端だけをマリーの膣口が強く締め付ける。引き抜けば縋るようにスピナの媚肉が纏わり付いてきて、押し込めばどこまでも肉を歪ませながら受け入れていく。互いの性器の長さが倍になったかのようだった。

スピナの肉を押しのけながら、マリーの膣口をこじ開けて子宮口をトントンと叩く。

腰を引けばつるりとマリーの膣口が先端を撫でながら、スピナの柔らかな蜜壺がどこまでもオウ

ルの怒張を包み込む。どれだけ大きく腰を動かしても、気持ちの良い肉に包まれ擦り上げられる。この上ない快楽だ、とオウルは思った。

しかしその考えが間違いであったことを彼はすぐに悟る。

リルの尾がそそり立った茎の根元にきゅっと巻き付き、先端にユニスの舌の感触を覚えたからだ。

英雄の少女は口を大きく開けて、はしたなくよだれを垂らしながら虚空で姿の見えない男根を舐めしゃぶっている。普段快活な少女が見せる淫靡な雌の姿に、オウルの肉槍は更に硬度を増す。

淫魔の美女はその種族とはかけ離れた、恋い慕う乙女のような表情で夫を見つめていた。だがそうしながらも、その尾はまるで別の生き物のように、オウルの動きに合わせて竿を扱き立てる。

オウルは堪らず二人を抱き寄せて、乳房と尻とを鷲掴みにし、誘うように半開きにされたリルの唇にむしゃぶりついた。打てば響く鐘のように、舌が絡みついてくる。リルとユニスの指がついと胸元を撫でてくるのを感じながら、オウルは熱く滾った肉棒をスピナとマリーの秘裂に何度も打ち込んだ。

そうしながら同時にユニスの口内を喉奥まで犯し、リルの口の中も舌先で蹂躙する。四人の妻を同時にいっぺんに犯すような興奮に、流石の魔王も我を忘れ猛り狂った。突き込みながら一度、二度放ってもその怒張は萎える気配も見せず、リルを、ユニスを組み敷いて再び犯す。

最後は四人の妻全員の口奉仕を受け、己のものだと主張するかのように四人の髪と顔とに白濁をぶちまけて、魔王はようやく眠りについた。

How to Book on the Devil

DUNGEON INFORMATION

ダンジョン解説

【ダンジョンレベル】

1

new 新しい迷宮 dungeons

【森のダンジョン】

迎撃力:E　防衛力:E　資源:D　居住性:C

地下にできた石造りの迷宮と、地上にできた木々の迷路の二階層で構成されたダンジョン。
急造であるため、設置された罠は最低限のもので守衛となる魔物も殆どおらず、辛うじてダンジョンの体裁をとってはいるが実際は張り子同然である。木材と木の実や茸といった食材にだけは困ることがないのが救い。

new dungeons 新しい施設 installations

【迷いの森】

魔力を豊富に蓄えた木々と幻術、回転床、固定転移陣などを組み合わせて作られた不定形の迷路。空間の繋がりが特殊なために地図を書くこともできず、侵入者を惑わせる。

【台所 LV1】

リルが自ら設計し作り上げた彼女の城。とはいえ石で作った簡単な竈と木製食器棚がある程度の簡素なものである。

new dungeons 新しい戦力 potential

【動く樹木】戦力:4

ダンジョンの元となった森に元々自生していた魔物。調査の結果、樹に酷似した姿を持つ生き物トレントとは異なり、本物の樹に寄生して動かす悪霊の一種ということが判明した。動き出すまで本物の樹と見分けがつかないため、強さ以上に危険な存在である。

new dungeons 新しい住人 resident

オウル 戦力:6

STR:10　IQ:18　PIE:20
VIT:13(+5)　AGI:8　LUC:9

大陸を統べる魔王。その知略智謀に目が行きがちであるが、最も優れているのは決めたことを遂行する不屈の精神力、意志力の強さである。魔術で若返った肉体は持久力にも優れているが、それが発揮されるのは概ねベッドの上である。

マリー 戦力:7

STR:15　IQ:12　PIE:12
VIT:15　AGI:14　LUC:20

ダンジョンで育った少女。若くして剣術、魔術、法術を修めており多彩な才能を見せるが、どれも一流と言うには程遠く器用貧乏の域を出ていない。唯一運と勘だけは非常によく、人類最高峰レベル。

ソフィア 戦力:6

STR:1　IQ:1　PIE:1
VIT:1　AGI:1　LUC:1

生後間もない姿の赤ん坊。まだ言葉を話すことも、立って歩くこともままならない。

STR:力。単純な腕力だけでなく、武器の扱いの上手さなども含めた攻撃力を表す。
PIE:信仰心。神や自負心など、己を支える心柱への信仰。我を貫く意志の強さを表す。
AGI:素早さ。身の軽さや動きの速さに加え、反射神経など反応の速さ全般を表す。
IQ:知恵。知識の量や頭の回転の速さ、記憶力など知能全般を表す。
VIT:生命力。体力だけではなく、生きようとする力そのものを表す。
LUC:運の良さ。運命の神にどれだけ愛されているか、勘の鋭さなどを表す。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富 1-3-7 ヨドコウビル
TEL.03-3555-3431(販売)／FAX.03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、
ホームページ上に転載することを禁止します。
本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。
また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

http://ktcom.jp/